



プロセスの分かる仕組みが大切

俵 浩 三

役所や会社の大きなビルを訪ねたとき、よくエレベータに乗る。まず昇りの△ボタンを押す。あとは表示ランプを眺めながら、いま自分が待っているエレベータは何階まで降りてきたかの見当をつけ、二階までくれば今度は目の前のドアが開く、と心の準備ができる。ところが近代的ビルには、エレベータの階数表示ランプがない場合があり、自分が待っているエレベータが、昇っているのか、下っているのか、何階にいるのが分からないことがある。突然、反対側のエレベータが先にきて大勢の人がそこに殺到し、初めから待っている人は乗り遅れてしまう、ということもある。私はそういうエレベータが大嫌いだ。前者はプロセスが分かるのに対して、後者はプロセスが分からず、結果だけが分かる仕組みである。後者は近代的な建築デザインかもしれないが、人の心理が無視されている。

近ごろは医者にかかっても、インフォームドコンセントが大切だといわれる。医者から病状をよく説明され、患者はその説明内容を納得して、手術を受けたり、薬を飲んだりするのである。これも、結果だけでなくプロセスが分かる仕組みである。

ところで最近の北海道の自然保護の最大の話題は、千歳川放水路と士幌高原道路の行方である。双方とも、北海道自然保護協会が大きなエネルギーを注いで反対運動をつづけてきたものであるが、その運動の成果があって、双方とも開発計画の抜本的な見直しが行われ、いま大詰めを迎えている。ところが見直しの仕組みは、まことに対照的である。

千歳川放水路計画は北海道開発局が事業主体であるが、その計画見直しは北海道知事に一任され、学識経験者からなる千歳川流域治水対策検討委員会が、第三者の立場から見直しに当たっており、開発局は当事者ではない。検討の場は公開で、白熱した議論の流れが道民の目によく見える。プロセスが分かる仕組みである。

ところが士幌高原道路計画は、事業主体の北海道が自ら見直すシステムで、第三者の目を欠いている。時のアセスメントというしゃれた名前で世評はよいが、事業主体にとって都合の悪い情報はいっさい公開しない。従来の北海道行政が、自然保護の基本を無視しながら道路建設推進に向かってきたことに、「時間の物差し」を当てて検証することこそ最も重要でありながら、それをどう検証したのか、しないのか、北海道は黙して語らない。

プロセスが分からず、結果だけ示して、「道民の皆様のご理解を」といわれたのでは、賛成派にしても、反対派にしても納得できないだろう。住民参加、住民による監視、情報公開、行政の説明責任、というキーワードが空々しくひびくだけある。

たわら・ひろみ

1930年東京都生まれ。千葉大学園芸学部卒業。現在、専修大学北海道短期大学教授、学術博士。著書に「北海道の自然保護—その歴史と思想」「緑の文化史—自然と人間とのかわりを考える」など。